



写真-1 あじわら小径沿いを流れる味原川旧河道（平成27年6月撮影）

■ 平成2年災害発生、放水路による抜本策を講じる

冬の松葉ガコと春のホタルイカ、いずれも水揚げ日本一を誇る浜坂漁港。その背後に発達した浜坂の街の東端に沿って流れ、岸田川に合流しているのが味原川（あじわらがわ）です。この川は流路延長 2.89km、流域面積 3.82km²の二級河川で、古くは白川、下川と呼ばれ、浜坂の歴史・文化・暮らしに深く関わってきました。飲み水や洗い物、酒づくりの他に、雪捨て場、防火用水、そして古くは川舟による物資の輸送などにも利用されてきました。このように、人々の暮らしにさまざまな恵みをもたらす川も、時として人々に牙を剥くことがあります。

平成2（1990）年9月19日から20日にかけて但馬地方を襲った台風19号は、味原川を氾濫させ、浸水面積約47ha、浸水家屋231戸に達する戦後最大の被害をもたらしました。

味原川では、昭和62（1987）年の台風19号や昭和63（1988）年の9月豪雨をはじめとしてたびたび浸水被害が発生していて、過去に二度現川拡幅による改修を県が地元へ提案しましたが協力が得られなかった経緯があります。このような経緯に加えて、味原川右岸側に郵便局やスーパーマーケットが立地し現川拡幅が難しくなってきたことから、平成2（1990）年災害への対応策として放水路案を提示しました。しかし、この案でも圃場整備済の優良農地をつぶすのか、といった反対の声がありましたが、「これが河川改修のラストチャンス」との県の強い思いが理解され事業化の目途が立ちました。

そして、町が計画中の公共下水道「浜坂浄化センター」とも調整しながら計画をまとめあげ、平成4（1992）年度に広域基幹河川改修事業として採択されました。



写真-2 味原川改修計画（「味原川がソリット」から引用）

■ 上流部の洪水全量を放水路に流す

抜本的な治水対策の根幹をなす放水路工事は、用地取得後の平成 7（1995）年度に着手、平成 14（2002）年 7 月に完成しました。延長 440m、川幅約 27m、流下能力は旧河道の約 30 倍（ $Q=60\text{m}^3/\text{s}$ ）で上流部の洪水の全量を受け持ち、水辺に親しみやすいように緩傾斜の植生護岸を採用しています。岸田川との合流点には、逆流を防止するため 4 門のスライドゲートをもつ味原川樋門が設置されています（排水ポンプは未整備）。

なお、味原川旧河道は沿川市街地の雨水だけを受け持つとともに、平常時は下の写真-3 のように堤外水路で水を引き、取水樋門から維持用水を取り入れています。



写真-3 味原川旧河道への取水樋門



写真-4 白川橋から味原川放水路を撮影

■ 江戸期の繁栄を伝える味原川沿いの街並み

放水路の完成により旧河道となった味原川には、「川途（かわと）」と呼ばれる約 500m の川沿いの道があります。今、この道沿いに、「加藤文太郎^{*1} 記念図書館」（平成 6 年開館）や浜坂の地が輩出した先人の足跡を紹介する「浜坂先人記念館・以命亭（いめい亭）^{*2}」（平成 4 年開館）が整備され、案内板や木製のベンチ、橋などが設けられ、川途は「あじわら小径（こみち）」と呼ばれる散歩道になっています。



写真-5 浜坂先人記念館「以命亭」



写真-6 加藤文太郎記念図書館から「以命亭」を撮影

その味原川沿いには、湧出する豊富な伏流水を利用して、明治 10（1877）年頃には何と 22 軒の造り酒屋がありました。そのうちの 1 軒が七釜屋森家です。

森家は、江戸時代中期に七釜村から浜坂に出てきて、やがて財を成し地主として成長、三代目與右衛門がわずかの酒造株を手に入れて酒造業を始めます。その傍ら、浜坂村の庄屋を務めていたそうです。明治 25（1892）年頃に酒造業にかかる税金が高くなったことから造り酒屋は 6 軒に減り、昭和 40 年代に「宇都桜」の製造が中止になって、浜坂地域での酒造業は残念ながらなくなってしまいました。

浜坂先人記念館「以命亭」の建物は旧森家の住宅で、現在町が所有しています。

豊富な湧水は、人々の暮らしにも深く関わっていました。湧水を利用した共同の井戸場が多数あって、人々は野菜や食器を洗ったり、洗濯などに利用したりして、井戸場は地元のおばさんたちの社交場でもあったそうです。昭和 40 年代以降水道の整備により、ほとんどの井戸が埋められてしまいましたが、平成 18 (2006) 年にかつての井戸場に屋根付きの木造上屋と、井戸場につながる木橋が整備されました。



写真-7 復元された井戸場

江戸期の繁栄を今に伝える味原川および「あじわら小径」を中心とした浜坂地区のすぐれた景観を保全するため、平成 20(2008)年 3 月 28 日「浜坂味原川周辺地区」が歴史的景観形成地区に指定されました。

※1 加藤文太郎：明治 38 (1905) 年～昭和 11 (1936) 年。新温泉町浜坂出身の登山家。パーティーを作って登るのが常識とされる山岳界の常識を覆し、単独行によって数々の登攀記録を残した。登山に対する精神と劇的な生涯から、新田次郎の小説『孤高の人』のモデルとなった。大正 12 (1923) 年頃から本格的に登山を始める。当時、須磨に住んでいて六甲山が目と鼻の先にあったことから、現在ではポピュラーとなった六甲全山縦走を始めている。歩くスピードが非常に速く、早朝に須磨を出て六甲全山を縦走し、宝塚に下山した後、その日のうちに、また歩いて須磨まで帰って来たという。距離は約 100km に及ぶ。(六甲全縦を3回経験している筆者でもわかには信じがたい。) 昭和 11 (1936) 年 1 月、数年来のパートナーであった吉田富久と共に槍ヶ岳北鎌尾根に挑むが猛吹雪に遭い天上沢で 30 歳の生涯を閉じる。



写真-8 加藤文太郎記念図書館

※2 以命亭：旧浜坂町が、かつて造酒屋だった森家・七釜屋屋敷を買い取り、浜坂の地が輩出した先人の足跡を紹介するために平成 4 (1992) 年に開設したもので、「以命亭」は、森家二代目当主・與右衛門が長子に家督を譲り、屋敷の裏に建てた隠居所「以命亭」に由来する。「以命」とは、中国の古書『礼記』の「君子は易きに居て以て命を俟つ。小人は險(さ)しきを行って以て幸を徼(もと)む」から採ったもの。「以命」の語源は、その意味するところが深く、森家を継ぐ当主たちは、それぞれが身に付けた学問分野で「以命」を解釈し、その真髓に迫る生活をしたとか。建物は平成 17 (2005) 年度に県の景観形成重要建造物に指定、平成 20 (2008) 年 7 月、国登録の有形文化財に登録されている。



図-1 味原川周辺の地図

■ 「浜坂針」隆盛の基礎を築いた市原惣兵衛

味原川旧河道の左岸沿いには、旧家の高い石垣が連なり、かつて縫い針生産で栄えた往時を偲ぶことができます。江戸中期、浜坂村は貧しく生活は不安定でした。商家の家に生まれた市原惣兵衛^{※3}は、「これではいけない。適当な産業を考えねば。」と思い立ち、寛政6(1794)年頃、惣兵衛は渡辺丈兵衛と共に長崎に針金商法を学びに行きます。惣兵衛24才、丈兵衛29歳でした。惣兵衛は、長崎で行われていた縫い針の製造に着目します。

なぜ縫い針に着目したのでしょうか。浜坂村の東を流れる岸田川の上流域には山陰帯の磁鉄鉱系列花崗岩(宮津花崗岩)が分布し、これに含まれる砂鉄は良質で、掘り崩して砂の中から砂鉄を採ることができます。岸田川の右支川久斗川の上流にある久斗山には砂鉄を製錬する「たたら場」があって、製錬された鉄を使って針金生産が行われていたことから、惣兵衛は縫い針製造が浜坂に最適の産業と考えたのでしょうか。

長崎で二人の若手技術者(高比良武兵衛・香具喜五郎)を雇い、廻船に乗って浜坂に連れ帰り、縫い針製造を始めました。しかし、縫い針製造は火を使うことからなかなか村民に受け入れられませんでした。これは、安永8(1779)年4月に起きた浜坂村の大火で家屋371戸、寺2ヶ寺、村が8分どおり焼失したことが背景にあったようです。しかし惣兵衛はくじけず庄屋と交渉して町はずれに作業場を造り、家族や縁者を動員して縫い針製造を続けました。そのうち、この仕事がこの地方に適した仕事であることが人々に理解され、やがて針職に従事する人が増えてきました。享和2(1802)年になると、越前屋宇兵衛が浜坂針を京阪の地で売り出します。

惣兵衛は天保6(1835)年10月、65歳で亡くなりました。針製造を始めたことで、その後一家は離散し、家業を失いましたが、彼が始めた針製造事業は郷土の産業となり、多くの人々の生活を支え、戦前・戦後を通じて浜坂針は「みすや針」の名で全国に知られるまでになりました。水車動力を利用して機械製針が行われるようになったこの縫い針は、すべりと弾力性に富んでいるのが特長で、針金生産とともに驚異的な発展を遂げ、幕末から明治初期にかけて、「針と針金の町」として盛況を呈しました。

※3 市原惣兵衛：「以命亭」の西にある勝願寺に伝わる「市原惣兵衛伝」が惣兵衛について書かれた唯一の文書。ただ、惣兵衛のプロフィールについては複数の資料で混乱が見られる。本文は、新温泉町まち歩き案内所の展示資料をベースに記述している。

■ 石垣の小径

味原川旧河道の左岸には、かつての繁栄をしのばせる見事な石垣が続いています。屋敷ごとに石垣の積み方が異なり、亀甲積み、算木積みといった珍しい積み方から、野面積み、間知石の谷積みなどのポピュラーな積み方まで様々な石積みが見られます。近年、腕のいい石工が少なくなりましたが、さまざまな石の積み方を1ヶ所で見ることができ、所々に“四つ目”があったりして石積みの学習をするには格好の場所です。

○ 亀甲積み(きっこうづみ)

石材を六角形に加工して積み上げる切込み接ぎの石垣の一種。亀の甲羅模様に見えるためこう呼ばれています。力が均等に分散するため崩れにくい。最も上品な石積みとされています。

○ 算木積み(さんぎづみ)

石垣の角部に用いる積み方です。石垣は角の部分が特に崩れやすく、直方体に加工した切石を交互に積み上げて強度を持たせています。

○ 野面石積み(のづらいしづみ)

自然石をそのまま積む方法。粗野に見えますが排水性に優れ意外に丈夫な積み方です。



写真-9 亀甲積み



写真-10 算木積み



写真-11 野面石積み

■ 県が消雪用水源を求めてボーリング中に温泉が噴き出す⇒浜坂温泉の誕生

西光寺近くの大正橋から 20mほど西に行った旧県道沿いに「浜坂温泉源泉塔」があります。新温泉町役場中庭にある温泉の由来を記した立札によると、「昭和 53 (1978) 年 3 月浜坂市街地の消雪用水源を求めてボーリング中（掘削深度：200m）、突然自噴してきた温度 76 度、湯量毎分 6 百ℓの温泉である。泉質はナトリウム、カルシウム、塩化物泉で、婦人病にすぐれた効能を持っている。」とあります。

新温泉土木の M 副所長によると、消雪用水源を求めてボーリングをしたのは県で、20 数 m ほど掘進した段階で 30 度近い温水を確認しました。しかし、これを消雪用に使用すると大量の水蒸気が発生して視界不良になる恐れがあるため断念し、ボーリング孔は町に引き継いだそうです。

その後、町が掘り進め、昭和 57 (1982) 年 6 月から浜坂市街地の約 800 戸に配湯、家庭温泉の夢を実現し、健康増進、省エネに大きな役割を果たしています。



写真-12 旧県道沿いにある浜坂温泉源泉塔

■ 清流復活をめざして

浜坂地区の生活排水を処理する「浜坂浄化センター」は平成 11 (1999) 年度から供用していますが、各家の排水管の下水道への接続率は浜坂処理区で 74.3% (H.23.3 時点) と低く、川沿いの一部の家の排水管から旧河道に生活排水が排出されています。各戸に配湯されている温泉も、一部は使用後この川に排出されているでしょう。

接続しない理由は、人家密集地のため接続工事が高額になる、所有者が高齢で跡を継ぐ者がいない、過去に設置した浄化槽がまだ使えるなどなど。それでも、下水道が整備されたことで、旧河道の水質は以前に比べかなり改善されて、5cm から 10cm 程度の小魚（たぶんウグイ）が群れをなして泳いでいます。また、カニ（新温泉土木の K 元所長いわく、ベンケイガニかアカテガニではないか）もいて人の足音で一斉に石積みの下に隠れます。生物が住めないほど水質が悪いわけではないのですが、せっかく下水道を整備しても接続しないと意味がありません。

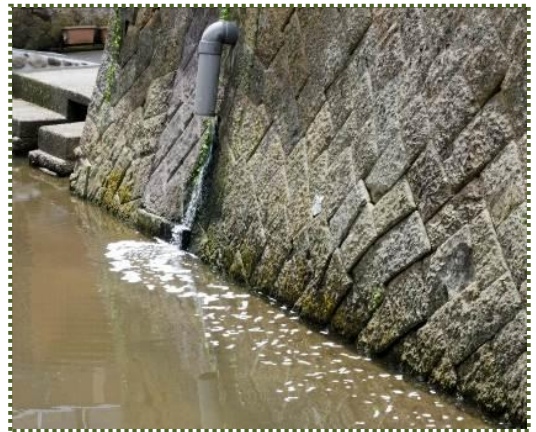


写真-13 旧河道へ排出される生活排水

味原川下流地区はもともとまちの景観や環境保全に対する住民の思い入れが強い地域であったことから、河川改修をきっかけにまちづくりへの意識がさらに高まり、平成 14 (2002) 年 6 月、地域住民を主体とした「味原川清流会」が発足しました。

会では、環境保全や水文化に関する学習会を開催したり、定期的に放水路や旧河道の清掃活動を行ったりしています。県民が行う県管理施設の清掃などの自発的な活動を支援する「ひょうごアドプト」にも認定され、『あじわら川清流会通信』を毎月発行するとともに、自然再生をテーマとした勉強会やフィールドワーク、写真展、講演会を開催するなど活動の幅を広げています。いつの日か、味原川の清流が復活することを願って！

■ 味原川旧河道の河口部には旧浜坂漁港がある

味原川旧河道の河口にある船溜まり（写真-14）が、旧浜坂漁港です。岸田川河口に位置することから、洪水の影響をまともに受け、逆流土砂が港内および港口に堆積して船の出入りが困難になることがあります。冬季には日本海特有の北西風による激浪のため、しばしば港口が閉鎖され、船舶の出入りが不可能になることも。

このような状況を踏まえ、戦後、漁港修築に向けて陳情活動が行われ、現在の場所（新温泉町芦屋）に新漁港を建設することとして、昭和 23 (1948) 年 10 月、その起工式が行われ、昭和 29 (1954) 年度に一応の完成を見ました。

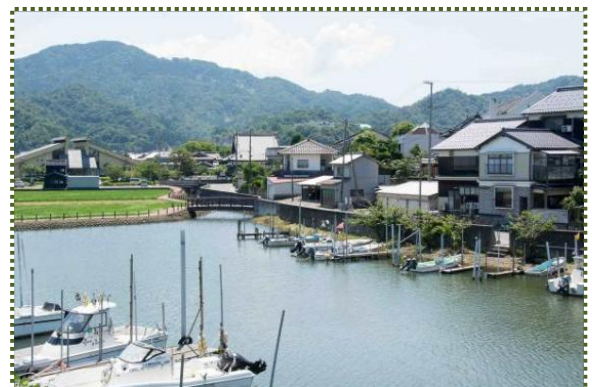


写真-14 岸田川堤防上から旧浜坂漁港を撮影

■ モノローグ

「あじわら小径」を何度か歩きました。小径沿いに設置されている案内板には「あじわら小径」と書かれていて、何人かの人に「味原」の読み方を聞いても「あじわら」との答が返ってきますが、味原川放水路に架かる橋の親柱には「あじはらがわ」、町広報誌でも「あじはら小径」とあります。いずれが正しいのか役場に聞くと、呼び方は「あじわら」、かな書きする場合は「あじはら」とのこと。(ほんまかいな！本号では「あじわら小径」で統一している)

「あじわら小径」沿いには、江戸期の繁栄が偲ばれるような立派な石垣がある一方で、コンクリートブロックの擁壁、朽ちはじめた板塀、剥げかけの白壁があったりして、きびしい現実も目にします。せっかく歴史的景観形成地区に指定されているので、息の長い取り組みになるとと思いますが、いずれは風情のある石積みや板塀、白壁が再現されることを願っています。



写真-15 あじわら小径と味原川旧河道



写真-16 あじわら小径と味原川旧河道

【参考資料】

- 1 『岸田川水系河川整備計画』 兵庫県 平成 22 年 5 月
- 2 『浜坂町史』 浜坂町 昭和 42 年 4 月
- 3 『広報 しんおんせん 6』 新温泉町 平成 18 年 6 月
- 4 『広報 しんおんせん 9』 新温泉町 平成 23 年 9 月
- 5 『旧森家住宅（浜坂先人記念館以命亭）』 新温泉町 HP
https://www.town.shinonsen.hyogo.jp/page/?mode=detail&page_id=b7363eaa80e4778a042bcb2b5e4542e5
- 6 『CON-TECH ひょうご・第 19 号～事業レポート』 公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 平成 16 年 1 月
- 7 『景観ガイドライン～新温泉町浜坂味原川周辺地区』 兵庫県県土整備部まちづくり局都市政策課・新温泉町建設課 平成 20 年
- 8 『但馬のみなの歴史』 「但馬のみなの歴史」編集委員会編 令和 7 年 5 月
- 9 『以命亭』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 24 (2012) 年 9 月 『ひょうご水百景』 No.16

改訂：令和 8 (2026) 年 4 月 『ひょうご水百景』 No.16